

増永理考著

『ローマ帝国を生きたギリシア都市』

—小アジアにおける文化・経済のダイナミクス—

大清水 裕

ローマ帝国は、地中海に面するすべての地域を支配下に収めた。空前であり絶後でもある。『ローマ帝国を生きたギリシア都市』という本書のタイトルは、アフリカやヒスパニア、エジプトやシリアなどと同様に、ギリシアもまた、ローマ帝国を構成する一部であったことを表している。しかし、古代ローマ史の研究は、その名から想像されるように、首都ローマ、あるいはイタリア半島を中心とした視点になりやすい。ここ数年、ローマ帝国支配下の北アフリカに関心を持っている評者としては、本書の刊行を大変心強く感じている。

「あとがき」によれば、本書は、著者が二〇一九年に京都大学大学院文学研究科に提出した博士論文に加筆・修正を加えたものであるという。既刊の論考に基づく五つの章と補論に加え、序章など、書下ろしとなる五つの章から成っている。まず各章の内容を簡単に紹介したうえで、本書の意義と気になった点をまとめてみたい。

「ローマ帝国のなかのギリシア」と題された序章は、「ギリシア人たちは自由を忘れてしまった」（三頁）という印象的な引用から始まる。「ローマの平和」の時代に書かれたパウサニアスの『ギリシア案内記』に残る、一世紀後半のローマ皇帝ウェスパシアヌスの言葉とされるものである。つとに指摘されるように、「自由」の理解はギリシア人とローマ人との間で異なり、ローマ人の理解する「自由」は一定の制約を伴うものであった。他方で、同じく著者の引用する帝政成立期の詩人ホラティウスの言葉「捕らわれしギリシアは、猛き勝者を虜にせり」（四頁）が示すように、ローマ人がギリシア文化を愛好したことも事実である。著者は、「ローマ人にとって、ギリシア人を支配するということは、自分たちに匹敵する、あるいはそれ以上のレヴェルの文明を有する者たちを配下に収めることを意味した」（五頁）と述べる。そして、それゆえに「ローマ帝国社会において、ギリシア人は特異な位置に立っていた」（五頁）のであり、あるいは「ギリシア人たちのローマ帝国における立ち位置は、他地域の帝国住民に比べて特殊であった」（三頁）とされる。序章で示されるローマ帝国におけるギリシア人の立場の特異性こそが、本書の議論の前提となっている。それを踏まえて、ギリシア人の視点から見たローマ帝国支配の実態を探ることが本書の目的となる。

書下ろしとなる第一章「たそがれのギリシア都市? ——学説史とその問題」と、第二章「小アジアにおけるギリシア都市の広がり」と構造」は、第三章以降で展開される議論の前提となる部分である。第一章では、ローマ帝国支配のギリシア文化圏への拡大とその展開をめぐる先行研究が、第二章では、小アジアにおける

ギリシア都市の構造について、それぞれ整理されている。本書の副題に「小アジア」とあることが示すように、著者の想定する「ギリシア」は、現在のギリシアに限られない。第一章では、「小アジアや中東のシユリア地方、さらにはエジプトにまで及ぶ」(一二頁)というギリシア文化の広がりとして、小アジアを舞台としたギリシア都市研究の隆盛が語られている。中でも著者が注目するのが、エヴェルジュティスムと呼ばれる、都市有力者による恵与行為についての研究である。それに基づいて、ヘレニズム時代からローマ時代に至るギリシア都市の連続性が確認されている。そして、先行研究では、恵与を行う側である「有力者」とつてのエヴェルジュティスムの意義が明らかにされるにとどまり、交渉というかたちで有力者に相対していた人々にとつてのエヴェルジュティスムの意義は依然解明されていない(二五頁)という指摘が続く。さらに、恵与行為の中心が「公共建築物の造営から祝祭の開催へと緩やかに変遷していること」(二六頁)も検討課題として挙げられている。

第二章では、小アジアのギリシア都市の分布や都市内部の構造が文献や碑文などの史料に基づいて概観されている。都市の数は史料によって挙げられる数字が異なるものの、数百に及び、都市の規模も、人口一〇万程の大都市がある一方で、多くの都市は一万から一万五〇〇〇人ほどだったと推測されているという。小アジアのギリシア都市の姿は多様だったことが理解できる。また、都市には、意思決定機関として評議会や民会が置かれていた。都市有力者から成る評議会に対し、かつて形骸化したと考えられていた民会は、近年ではその機能が再評価されているという。前章

で挙げられた課題を第三章以降で議論していくに際し、重要な論点である。

「公共建築物と都市」と題された第三章では、前章までの議論に基づき、エフェソスやブルサの事例が取り上げられている。アジア属州最大の都市であったエフェソスに残る数多くの碑文と、小アジア西北部ピテュニア地方の都市ブルサで活躍したディオ・クリュソストモスの弁論を素材として、有力者に相対した都市側の動向が分析されている。「ローマの平和」のもと、官職獲得などを目指して都市を離れる有力者が増加するなかで、有力者を都市に結びつけようとする人々の意図が見出されている。

第四章「祝祭と都市」においては、小アジア南西のカリア地方の中心都市だったアフロディシアスを中心として、第一章で挙げられたもう一つの課題、公共建築物に代わって増加したという祝祭の開催が検討されている。開催された「ギリシア風競技」は、小アジアのギリシア都市の間で生じていた競争において都市の名声を高める役割を果たしたとされている。また、競技祭に見られる剣闘士競技や皇帝礼拝といったローマ的な要素も、都市間競争で優位をもたらしものだったという。劇場や競技場の座席銘文から他都市との関係を分析するプロセスは面白いが、本書の課題とされた有力者と相対する都市の人々の姿は見出し難いように思われた。

第四章に続く補論は「アフロディシアスにおける劇場の動態的観測」と題されている。同市の劇場を対象として、碑文を単なるテキストではなく、その空間的特性を加味して分析しようとして試みている。前一世紀末から後三世紀に至るまで、劇場という限られ

たスペースを奪い合うかのように善行者の碑文が蓄積されたのち、三世紀半ばには「アーカイヴ壁」に都市の地位に関する数百年分の文書が集められたという。アフロディシアスの劇場が「記憶の場」であったという指摘は妥当だとしても、「アーカイヴ壁」というアフロディシアス固有の史料をどのように理解すべきか、もう少し深い議論があれば、第五章という位置づけになったのである。

第五章「コイノンにおける恵与と都市」では、コイノンと呼ばれる「諸都市の地域的な連合組織」（一四七頁）による公的事業、なかでも小アジア南岸西部のリュキア地方で二世紀半ばに活躍したオブラモアスという人物の事例が取り上げられている。コイノンを介した彼の活動については、リュキアの都市ロディアポリスで発見された一連の碑文群を中心に情報が残されているという。それらによれば、彼はリュキアの各都市で公共建築物の造営・修復に巨額を費やしていた。彼の恵与行為に注目してきた先行研究に対し、著者は、特にミュラという都市に注目して、コイノンを介して利益を獲得しようと動く都市側の動向に目を向けている。ミュラの事例について、著者が慎重に「他都市への一般化は難しい」（一七三頁）と述べている点には好感を持てるが、他都市を含めたリュキアのコイノン全体の動向のなかにより明確に位置づけられるなら、さらに説得力を増したかもしれない。

第六章「公共建築物から祝祭へ」では、これまでの議論を踏まえて、二世紀に恵与の内容が公共建築物から祝祭の開催へと変化していった理由について考察している。著者は、公共建築物や祝祭の開催が諸都市にもたらした経済的利益に注目し、それが恵与

の受け手である都市側にとって重要だったことを指摘する。有力者にとって公共建築物の提供がもたらす名誉が減退したのに対し、祝祭の開催の方が恵与者の名誉が持続的に確保された。さらに、ハドリアヌス帝によって祝祭の日程が調整された結果、諸都市にとっても経済的利益を確保しやすくなったという。公共建築物や祝祭の開催が諸都市にもたらした経済的利益という視点は興味深い。

第七章「公共建築物と祝祭の表象」では、諸都市の発行した貨幣の意匠が検討されている。諸都市の発行した貨幣において建築物が表現される場合、有力者による恵与行為の中では、公共建築物の造営から祝祭の開催へと比重が移っていった二世紀以降にこそ、神殿が表現されるケースが圧倒的に多かったという。著者は、それを「二世紀以降に再活性化するギリシア都市社会における宗教的環境を背景としていた」（二三六頁）と想定しているが、そもそも建築物も祝祭も貨幣で表現されることが少なかったとすれば、また別の解釈も可能かもしれない。

「ギリシア都市からローマ帝国支配をまなぐ」と題された終章では、これまでの各章の議論が再度確認され、「帝国の「共犯者」たる地方都市有力者の役割」（二四八頁）を重視してきた先行研究に対し、ギリシア世界では「有力者のみならず、彼ら以外の市民たちも、少なからず都市社会の運営に寄与した」（二四九頁）のであり、「ギリシア人社会では、必ずしも帝国の「共犯者」を介さない、西方に比べて相当に放任的な都市自治委任が実現していた」（同）と結論付けられる。そして、最後に帝政後期への展望に触れて、本書は閉じられている。

本書の意義は、何よりもまず、帝政期の小アジア諸都市の動向について幅広く論じたことにある。冒頭でも述べた通り、古代ローマ史研究は、どうしても首都ローマの動向に注目することになりやすい。その中であって、小アジア諸都市の動向、とりわけ都市有力者だけでなく、都市共同体を構成するそれ以外の人々の存在が果たした役割という著者の着眼点は、高く評価されるべきであろう。小アジア、中でもエフェソスを中心とするアジア属州は、カルタゴを中心とするアフリカ属州と並んで、帝政期にもコンスル経験者が元老院での抽選により派遣され続けた最重要属州の一つであった。また、小アジア北西部のビテュニア属州は、トラヤヌス帝と小ブリニウスとの間で交わされた書簡の存在ゆえに、先行研究でもしばしば言及されてきた。しかし、ブリニウス書簡の利用は、ローマ帝国の属州支配という一般論に回収されがちであり、必ずしも小アジアという地域の特色を明らかにすることにはつなげてこなかった。本書の刊行は、首都ローマに留まらないうローマ帝国史の多様性を示すものと位置付けられよう^①。

本書の特色として挙げられるべき第二の点は、使用されている史資料の多様性である。エフェソスやアフロディシアスを中心に小アジア各地で発見されている膨大なギリシア語碑文はもとより、第三章で取り上げられたディオナン・クリュソストモスの弁論や第六章の法史料に加え、第七章では貨幣も史料として取り上げられている。さらに、補論ではあったものの、碑文をアフロディシアスの劇場という空間に位置づけて分析することも試みられている。碑文を単なるテキストとしてではなく、モニュメントとして分析するという試みは、わが国では、古代ローマ史よりも、古代ギリ

シア史の分野で実践されてきたように思われる。ローマ支配下のギリシアに着目した著者ならではの視点といえるかもしれない。今後さらに試みを深化させてもらえればと思う。

このように、本書はローマ帝国史の多様性を示し、さらなる豊かさをもたらしてくれる好著である。各章での議論も、すでに査読を経て掲載されたものに基づいているため、安心感を持って読み進めることができる。しかし、それらの論考を一書にまとめたとき、気にかかった点がないわけではない。大きくは、本書で述べられている「ギリシア人」とはいかなる存在なのか、という疑問と、本書末尾で述べられた帝政後期への展望についてである。

序章の紹介のなかで、本書の前提として「ギリシア人たちのローマ帝国における立ち位置は、他地域の帝国住民に比べて特殊であった」と書かれていることはすでに述べた。本書終章の「ギリシア人社会では（中略）西方に比べて相当に放任的な都市自治委任が実現していた」（二四九頁）という記述や、あるいは序章でも「西方とは異なる、東方ギリシア語圏に特有なローマ帝国支配の構造」（六頁）が想定されていることを踏まえるなら、本書の結論は、「ギリシア」は「西方」に比して文化レベルの高い「特殊」な地域であり、それゆえ、帝国の「共犯者」たる都市有力者による権力の独占を許さず、民会や様々な中間団体も影響力を持ち続けたのだ、ということになるだろう。

著者がそう考える背景には、「ギリシア人」の存在があるようだ。著者は、第一章で「ヘロドトスが「ギリシア人」の定義として、血統、共通の言語や祭礼、あるいは生活様式を要素として記している」（二四頁）ことを挙げてその地理的広がり主張して

いる。また、終章では、「かのブルクハルトが、古代ギリシア人の本質を、常に競争を展開する「アゴン文化」とみなしたように、そのような根源的性質は、ローマ帝政期でさえも彼らの行動を絶えず規定し続けていた」（二四六頁）と述べている。前五世紀のペルシア戦争の時代に関してヘロドトスが伝える「ギリシア人」は、果たして帝政期にも「本質」、あるいは「根源的性質」において変わることなく存在し続けたのだろうか。評者には、にわかに同意し難い。

そもそも、第四章や補論、第六章で取り上げられた都市アフロディシアスは、アフロディテ神域を中心に前三世紀に共同体が形成され始めた場所であり、「ローマの影響を大いに受けた、帝政期を代表する都市」（二〇二頁）と著者自身が述べている。ヘロドトスの時代には存在せず、ローマ支配下で繁栄を謳歌した都市である。第四章の「おわりに」では、ミラーの研究を引いて「ローマ帝政期のギリシア都市を、単にローマと対置されるものではなく、様々なローマの要素が混合したものとして理解すべき」（二二三頁）とも述べている。一九世紀のブルクハルトを引用して「ギリシア人」を本質主義的に理解すべきではないのではないか。ヘレニズム諸王やローマ人の支配を経て、「ギリシア人」も変質していったと考えるのが自然だろう。既刊の論文に基づき諸章の慎重な書きぶりに比して、序章や終章の「ギリシア人」の表現には疑問を感じざるを得なかった。

この「ギリシア人」に対する疑問は、終章で「ローマ人」とギリシア都市が対置されたとき、さらに違和感をもたらすことになる。著者は、帝政後期への展望として、「二三世紀後半以降は、多

くの都市にとって支配者たるローマ人がより近い存在として感じられるようになり、ついには、彼らが都市財政をも管轄するようになった」（二五一頁）結果、「もはや都市には、ローマ人をよそに自律的に振舞う余地は縮小したのではないだろうか」（同）と述べている。しかし、ここで言う二三世紀後半以降の「ローマ人」とはいかなる人々であったのだろうか。

周知のように、二二二年、カラカラ帝は帝国内の全自由民にローマ市民権を与えたとされている。一部例外はあったとは言え、三世紀半ばには「ギリシア人」たちは、ローマ市民権を得て、もはや「ローマ人」でもあったはずである。ただし、このアントニヌス勅法によるローマ市民権の付与は、ローマ帝国社会を激変させたわけではなかった。都市国家ローマがその支配を拡大するなかで進めてきた、他都市の協力的な有力者に対するローマ市民権の付与という慣行の論理的帰結であったにすぎない。実際、著者も、エレールの研究を引いて「ギリシア人都市有力者のうち、帝国支配に加担する上での見返りとなるローマ市民権を保持する者は四割ほどしかないかった」（二四九頁）と述べている。このローマ市民権保持者が四割ほどだった時代がいつのことかは明記されていないが、三世紀半ばには都市有力者のすべてがローマ市民権保持者となっていたはずである。第三章で著者自身も述べているように、帝国の官職を得るギリシア出身者も増加していた。もはや「ローマ人」は外来の支配者ではなかったのである。著者が想定するのは違う意味で、「ローマ人」は身近になつていたのであろう。そもそも、アントニヌス勅法の発布前の段階で、有力者の四割がローマ市民権を持ち、帝国支配の「共犯者」となつて

いたのであれば、その時代の「ギリシア人」は、もはやヘロドトスの時代の「ギリシア人」とは別の存在となっていたと考えるべきだろう。

評者として、ローマ帝国支配下で「ギリシア人」など消滅してしまったのだ、と主張したいわけではない。著者がたびたび主張する「ギリシア人としてのアイデンティティ」（例えば六頁や一〇〇頁）は、もう少し複雑なものだったのではないかと思うだけである。第三章で取り上げられたエフェソスはアジア属州の州都であり、第四章で取り上げられたアフロディシアスは、三世紀半ばにはカリヤ属州の州都となっている。いずれも小アジアにおけるローマ支配の拠点となる都市だった。そのエフェソスを代表する遺構であるケルスの図書館の前には、その寄進者たる小アジア出身の元老院議員ケルスス・ポロマエアヌスの像が三体設置されていたと想定されている。現存するのはイスタンブール考古学博物館に展示されている「ローマ人」としての軍装像だけだが、おそらくその他に、「ローマ人」としてのトガ姿の像と「ギリシア人」としてのヒマティオン姿の像が設置されていたと考えられている。図書館前に置かれた騎馬像用の二つの台座の碑文も、一方はラテン語、他方はギリシア語であった。^④ローマ帝国支配下の小アジアにおいて、「ローマ人」であることと「ギリシア人」であることは、個々人の内部で共存していたものではあるまいか。アイデンティティは重層的かつ多面的なものであり、また、時代によって変化していくものでもあっただろう。「ギリシア人」のあり方もまた、ローマ帝国支配下で、あるいはヘレニズム諸王の支配下でもすでに、変容を余儀なくされていたと考えたい。

このように、「ギリシア人」の本質主義的理解を排した場合、その文化的レベルの高さにギリシアの特殊性を求めることは難しくなる。四世紀前半、著者に「西方」と一括りにされたアフリカの総監宛てに送られた法文のなかで、コンスタンティヌス帝は「アフリカでは慣習に基づいて人民の選挙によつても（都市政務官の）任命が行われている」と述べている。^⑤有力者だけによるのではない、住民参加による都市の運営は、帝政後期の北アフリカでも行われていたと考えられている。帝国各地の多様性を踏まえて、ローマ帝政前期、あるいは後期における小アジアのギリシア語圏社会の特色を再考する余地はまだあるのではないだろうか。

すでに述べたように、本書の最大の意義は、ローマ帝国支配下の小アジア諸都市に着目すること、ローマ帝国社会の多様性に対する理解を深めてくれたことにある。北アフリカに関心を持つ立場から、著者に無理難題を求めてしまったかもしれない。それも、本書の持つ問題意識に共感するゆえのことである。著者のご海容を請うて、結びとしたい。

① ローマ帝国史の地域的多様性を示す邦語の先行研究として、南川高志『海のかなたのローマ帝国・古代ローマとブリテン島』（増補新版）岩波書店、二〇一五年・井福剛『古代ローマ帝国期における北アフリカ・カルタゴ周辺地域における文化と記憶』関西学院大学出版会、二〇一八年・ジェラルド・クロン、ジャン・クロード・ゴルヴァン、瀧本みわ・長谷川敬訳『絵で旅するローマ帝国時代のガリア』マール社、二〇一九年・ピーター・バーソンズ、高橋亮介訳『パピルスが語る古代都市・ローマ支配下エジプトのギリシア人』知泉書館、二〇二

二年などがある。拙著『ローマ帝国とアフリカ…カルタゴ滅亡からイ
スラーム台頭までの八〇〇年史』中公新書、二〇二五年も参照。

② 師尾晶子「古代ギリシアの碑文研究の新潮流…碑文習慣をめぐっ
て」『西洋史学』二四二、二〇一一年、一四五―一五七頁…同「碑文
を見る人・碑文を読む人…古代ギリシアの公的碑文の開放性と閉鎖
性」『アジア遊学』九一、二〇〇六年、一五八―一六七頁などを参照³⁰⁾。

③ C. Roueché, *Rome, Asia and Aphrodisias in the Third Century*,
JRS, 71, 1981, pp. 103-120. なお、本書一〇二頁での言及とは異なり、
カリナ属州の成立はティオクレティアヌス改革の結果ではない。

④ R. R. R. Smith, *Cultural Choice and Political Identity in Honorific
Portrait Statues in the Greek East in the Second Century A.D.*, *JRS*,
88, 1998, pp. 56-93. A. S. Graham, *The Word is Not Enough: A New
Approach to Assessing Monumental Inscriptions. A Case Study
from Roman Ephesos*, *AJA*, 117 (3), 2013, pp. 383-412.

⑤ *CTh*, XII, 5, 1. 訳文は、テオドシウス法典研究会「テオドシウス法
典 (*Codex Theodosianus*) (一四)」『法政史学』六一、二〇〇四年、
一〇八―一〇九頁に基づくが、一部改変。

⑥ J. C. Magalhães de Oliveira, *Potestas populi: Participation populari-
re et action collective dans les villes de l'Afrique romaine tardive
(vers 300-430 apr. J.-C.)*, Turnhout, 2012.

※本稿は、科研費 (23K20508) の成果の一部である。

A 5 判、三八二ページ、二〇二四年、京都大学学術出版会

四六〇〇円 (税込五〇六〇円)
(東洋大学)